

スズムシの世話（変化や生長などを気付き、興味をもって繰り返しかわる）

文京区立根津幼稚園（東京都）

5歳児にとって飼育活動は、毎日繰り返す取り組みである。そのため、変化や生長など様々なことに気付き、友達や教師に話す姿が日常的にある。グループの友達と役割を分担して作業をする当番活動として進める飼育物が多いが、一時的に飼育するものは話し合い、興味をもった幼児や飼育を始めた幼児が行うこともある。しかし、そうして始めても、次第にみんなで順に世話をするようになっていく。この事例は飼育活動が定着した2学期当初、幼児が新しい飼育物にかかわる事例である。

（2・3年保育5歳児）9月

	教師の指導	幼児の姿	教師の捉えや評価
9 月 上 旬	<ul style="list-style-type: none"> 保護者から、2学期初日にスズムシをもってくる話を事前に聞いている。 教師が困っている話を聞き安心して始業式に臨めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> スズムシを持参した幼児は、虫が苦手だったが、スズムシを喜んで持ってきて、準備してあった机の上に喜んで置く。少し世話の仕方を説明することに自信がなくなったため、困って母親に確認しているのだが、詳しく教えてもらったのは祖父なので、母親では確認できない不安がある。 教師の援助で、安心して始業式に参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級で始めて飼うスズムシなので、祖父から教わったスズムシの世話をきちんと伝えたいが、自分しか説明ができないという責任感や不安な気持ちを感じられる。 よい機会なので、寄り添いながら解決し、一人でみんなに伝えられるようにする。学級の幼児たちも、友達の様子や気持ちを感じ、しっかり説明を聞いて飼育しようという気持ちになるようにしたい。
始 業 式 後	<ul style="list-style-type: none"> 始業式や学級での一斉活動後、言葉だけで説明することが難しいと思っているので、困っている具体的な内容を聞きながら、やりながら説明をするように促す。 そばで聞いていた友達の話聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師に世話の仕方を説明しながら、実際に世話をする。 興味をもって見ている幼児がたくさんいる。必死なので最初は緊張した様子だったが、家でしていたので、慣れてくると言葉は出なくても行動が進むので、見ている幼児たちに伝わる。 友達の分かった様子に気付いて嬉しくなり、「分かった！みんな分かるまで、僕が世話する」と笑顔で言う。 「僕たちも世話をしたい」「やり方分かった」「ありがとう」などという言葉が聞かれ、虫当番が世話をすることにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉で説明するということが自信がなかったが、教師の助言で、世話をしながら説明をすることができ、安心した。 やりながら説明すると自分でどうしたよいか分かることや、友達の様子からみんなが分かるまでは自分が世話をすればよいと気付くことができ、喜んで提案できた。 友達の思いも聴くようにしよう。 教師がいることで、2学期当初でも、幼児同士が思ったことを言ったり聞いたりして、問題をみんなで考えて解決する姿勢につながる場面ができた。
翌 日	<ul style="list-style-type: none"> 当番活動の様子を見守る。 幼稚園に餌になるナスがあることに気付かせナスを切るまな板や果物ナイフを提示する。 	<ul style="list-style-type: none"> スズムシ当番の様子をそばで見ながら、やり方を話す。 当番の幼児がナスがないことに気付き戸惑うが、教師の言葉で栽培しているナスを収穫し、さらに教師の示したまな板や包丁から、ナスを切って取り替えることがわかり、世話を続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が環境を提示することで、すぐに自分たちでかわり活動を進めることができた。 栽培活動が生きてナスのことに気付き、餌にするという目的で収穫することができた。また、包丁やまな板という魅力的で具体的な物があることで、使い方や行動が分かり、自分たちで進めることができた。



<p>9 月 上 旬</p>	<ul style="list-style-type: none"> 包丁は教師が管理し、幼児の要求で出す。 	<ul style="list-style-type: none"> スズムシの世話当番を楽しみにしている様子が見られる。ナスは毎日収穫できない場合もあるで、残りは職員室の冷蔵庫に預けるようになる。 スズムシの世話の後、しばらく静かにしていると鳴くことに気付き、鳴くまで楽しみにする幼児が増える。 	<ul style="list-style-type: none"> 世話をする飼育物が増えても、楽しみにしている。飼育物とのかかわりを楽しめるという心情が感じられる。 オスやメス、鳴く、鳴かないなどの区別が分かっているやりとりも聞かれる。知識や情報への興味もあるようだ。
<p>9 月 下 旬</p>	<ul style="list-style-type: none"> 弱ってきて泣き声が小さく少なくなる。スズムシと幼児の様子に応じた配慮をする。死んだことを幼児と受け止め、埋めてあげることに気付くようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> スズムシがだんだん弱って死んでしまうことを知っている幼児数名が、スズムシを囲んで「弱ってきている」「オスが先に死ぬよ」など話している。 昼食後、「やっぱりこれもう死んだ」と2名の幼児が教師に言う。教師の言葉から、埋めることに気付き、数名の幼児が弥生の森に埋めに行く。戻ってからも、オスの数を数え、スズムシの様子をしばらく見ている。 	<ul style="list-style-type: none"> 虫に詳しい幼児などで情報を交換したり知っていることを話し合ったりする姿がある。スズムシは家で飼っている幼児がいるので、興味のある幼児同士のやりとりは楽しいようだ。 死んでしまうことが予想されていたので、他の生き物が死んでしまった時とは、驚く様子が違い受け止めている様子がある。 知っている情報が、他の興味のある幼児にも伝わるようにし、気にして観察することにつながるようにする。

<考察>

- 飼育物の餌や世話の仕方を知ることは大切であると受け止め、当番活動をしていることが分かる。毎日繰り返す活動なので、興味をもってかかわれるようにしたり幼児が楽しく世話の作業を進められるようにしたりする工夫が必要である。
- 周囲の幼児はスズムシや世話をする友達の姿に注目し友達の話を聞くことができた。自信がなかった幼児は行動しながら説明も行うことができ快感を味わい、さらに注目されたことで、その友達の言葉を聞いて受け入れることができた。興味のある環境には、教師からの特別な助言がなくても、幼児は友達の言葉や動きに注目して、言葉や動きの意味を感じ、受け入れることができることが分かる。
- 幼児同士の情報が、新しい知識や気付きになり、改めて自分から環境にかかわり確かめたり興味を満足させたりする姿につながる。情報が伝わる場面を意図的に作ったり友達のモデルになる言動に注目できるような状況を作ったりすることは大切である。
- 生き物の命にかかわる経験や対応を丁寧に受け止めて、望ましい心情を体験できるようにする。

みどころ

2学期当初は、夏休みの経験や情報を交換する姿が見られます。田舎で祖父母から丁寧にスズムシの飼い方を教わって世話をし、「幼稚園でも飼いたい」とスズムシを持ってきた幼児の熱い思いが、伝わってきます。しかし、自分が教えてもらって 毎日やってきたことをことばで友達に伝えることは、思っていた以上に難しいことでした。何気なく夏休みの話をするとは違い、「正確に」「みんなに分かるように」ということを幼児なりに意識しています。聞いている学級の友達みんなも、その思いが分かって傾聴しました。そこで、自分にはスズムシの世話をできるという自信をもつことができ、こうして自分が世話をするとみんなにも分かってもらえるということを確認し、「分かった！みんな分かるまで、僕が世話する」ということばになって、表現されました。スズムシの世話のために栽培するナスを大切に収穫する姿やスズムシの生長や変容を見ながら知っている情報を伝え合う姿から、身近でみんなと世話をしている飼育物への親しみの深さが感じられます。